
 学 会 記 事

第54回新潟消化器病研究会

日 時 平成3年7月27日(土)
13時30分～18時
会 場 ホテル新潟

一 般 演 題

1) 当科における胃粘膜下腫瘍例の検討

東山 考一・阿部 要一
吉田真佐人 (木戸病院外科)

胃粘膜下腫瘍症例6例(神経線維腫1例, 平滑筋腫1例, 悪性リンパ腫2例, 平滑筋肉腫1例, 平滑筋芽細胞腫1例)につき検討を加えた。胃癌手術症例に占める割合は2.6%で男性4例, 女性2例で平均年齢は53.3歳であった。腫瘍の占居部位は良性腫瘍はA領域に, 平滑筋肉腫はM領域に見られ, 悪性リンパ腫では胃全体に広がっていた。悪性腫瘍では大きさが5cm以上で腫瘍の粘膜に潰瘍形成の傾向が見られた。術前生検により組織診断しえたのは6例中2例にすぎず術前診断の困難さがうかがわれた。手術は良性腫瘍には部分切除と核出術が, 悪性腫瘍および平滑筋芽細胞腫には胃癌に準じた根治術が行われ, 全例健在である。このうち比較的稀な平滑筋芽細胞腫の症例につき供覧する。

2) 壁外性発育を呈した巨大胃平滑筋腫の1例

羽賀 学・大竹 雅広
新国 恵也・吉川 時弘 (厚生連中央総合)
佐々木公一 (病院外科)

腹部膨満, 便秘を主訴にした82歳の女性が, 触診上腹部に小児頭大の腫瘤を触知され, 精査の結果, 嚢胞性変化を伴った巨大な胃平滑肉腫と診断された。腫瘍は胃体下部後壁漿膜より有茎性に胃壁外性発育を呈した嚢胞性で, 胃壁の一部と共に腫瘍摘出術を施行した。大きさは20×20×18cm, 1,800gで, 内容液は淡血性であり, 肝転移, リンパ節転移を認めなかった。組織学的には異型性が少なく, 核分裂像も極めて少ないため平滑筋腫と診断された。嚢胞性変化, 胃壁外性発育, 巨大腫瘤は肉眼的に悪性を疑わせる所見とされ, 病理診断と一致しないが, 組織学的に良性の診断で肝転移をきたした自験例もあることより, 十分なフォローアップが必要と考えた。

また, 胃平滑筋腫はほとんどが充実性で嚢胞性変化をきたした症例は稀である。さらに有茎性発育を呈した例は極めて稀であるため, 若干の文献的考察を加えて報告した。

3) 比較的短期間に発育したと思われる隆起性胃癌の3症例

田代 知子・斎藤 敦
山田 慎二・小黒 仁
田代 成元・宮入 健 (田代消化器科病院)

症例1は76歳女性。内視鏡的に腺腫を経過観察中であったが, 約1年の経過でI型早期胃癌を新たに幽門前庭部に生じ, 手術を施行した。症例2は52歳男性。内視鏡的に胃潰瘍を経過観察中であったが, 約3年の経過で小潰瘍がIIc+IIa型早期胃癌に進展したと考えられ, 手術を施行した。症例3は83歳男性。前年度, 過形成ポリープに対し内視鏡的ポリペクトミーを実施し, その経過観察のため施行した1年後の内視鏡でIIa+IIc型早期胃癌が見つかり, 手術を施行した。以上のように, 1年から3年という比較的短期間に早期胃癌が発育した事を内視鏡的に確認し得た症例と考えられたので報告する。

4) 小腸潰瘍の1例

太田 宏信・後藤 俊夫
関根 厚雄 (県立吉田病院内科)
榊原 清・阿部 僚一
吉岡 一典・小山 真 (同 外科)
長谷川 剛・本間 慶一 (新潟大学第二病理)
太田 玉紀・渡辺 英伸 (同 第一病理)

症例は53歳男性。平成1年5月腹痛にて当科受診。各種検査施行するも原因は不明であった。平成2年9月腸閉塞となるも保存的治療にて改善。平成3年2月再び腸閉塞となり入院。小腸造影で回腸に深い潰瘍をともなう腫瘤性病変があり, 不完全閉塞となっていた。血管造影では比較的血流に乏しかった。回腸切除術を行なったが, 病変は深い潰瘍で, 潰瘍縁は盛り上がっていた。組織学的には非特異性潰瘍であったが, ベーチェット病の主症状は認められず, 単純性潰瘍と診断した。診断に苦慮した小腸潰瘍の1例を経験したのでここに報告した。